

附属高等学校におけるオリンピック教育の実践

附属高等学校 奥村 準子

1. 第4回ユース・セッション in つくばクーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2016 への生徒派遣

(1) 概要

- 日 時：2016年12月23日（金祝）12時～25日（日）12時
場 所：筑波大学筑波キャンパス（茨城県つくば市天王台 1-1-1）
筑波研修センター（茨城県つくば市天久保 1-13-5）
主 催：特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー（NPO 法人 JOA）
特定非営利活動法人サロン 2002（NPO 法人サロン 2002）
共 催：筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
参加者：生徒 30 名中、本校生徒が 14 名（男子 6 名、女子 8 名）が参加。

本校の他に、附属駒場高校、附属坂戸高校、帝京高校、自由学園高校（男子部・女子部）生徒・引率教員が参加した。スタッフとして CORE から真田久筑波大学体育系教授、宮崎明世准教授、荒牧亜衣特任助教、大林太郎特別研究員が参加され、NPO 法人サロン 2002 から安藤裕一理事、嶋崎雅規理事、小池靖スポネットサロン 2002 メンバーにお世話になった。また、講師として田原淳子国士館大学教授（CIPC 副会長）、江上いずみ筑波大学客員教授、坂谷充筑波大学体育系特任助教、筑波大学アダブテッド体育・スポーツ研究室の杉山文乃氏から講義演習を受けた。さらに、国際ユースフォーラム経験者として本校卒業生の皆川宥子（日本女子大学 3 年）が参加し、参加生徒への確かなアドバイスをを行った。コーディネーターは本校の中塚義実が務めた。

(2) 告知・募集および事前学習

本フォーラムについて 10 月 6 日（木）、前期末試験後の全校集会で生徒全員に告知した。その際、2 年前にスロバキアで開かれた「第 10 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」に日本代表として参加した 3 年生の高橋優衣が、国際 YF とその派遣生徒選考会でもあるクーベルタン-嘉納ユースフォーラム（国内 YF）について全校生徒に説明した。

10 月下旬までに、14 名の生徒（1 年生 11 名、2 年生 3 名）が参加の意志表示をした。この段階では本校からの国内 YF 派遣生徒数が未確定だったことから、「全員が国内 YF に参加できるとは限らない」との前提ではあったが、11 月から定期的に集まり事前学習を行った。日本のスポーツのあゆみと嘉納治五郎の功績について理解を深めることと、14 名全員で課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう（日本語）」に取り組むことが事前学習の中心である。課題の意図は、日本の学校体育のルール校ともいえる本校のことを学ぶことがまず必要であるということである。

最終的には 14 名全員が国内 YF に参加することとなり、事前学習で作成したものを修正し、国内 YF 初日の学校紹介で活用した。

事前学習の日時と概要は以下の通りである。多忙な生徒たちは、昼休みには委員会、放課後には部活動がある。そこで勉強会の日時は特定の曜日に偏らぬよう、生徒自身が相談して決めた。

第 1 回：11 月 2 日（水）15：10～15：50

- ①国内 YF の位置づけと概要
- ②今後の「オリンピック教育」勉強会の進め方について

第 2 回：11 月 10 日（木）15：10～15：50

- ①DVD「嘉納治五郎ースポーツを通した人間教育」をみて嘉納治五郎の功績を学ぶ
- ②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」についての自由討議

第 3 回：11 月 18 日（金）15：10～15：50

- ①DVD「日本のスポーツ 100 年ダイジェスト版」をみて、日本スポーツのあゆみを学ぶ
- ②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」の進捗状況報告
歴史班・行事班・学校の特徴班に分かれてまとめる作業を進める

実践報告 ▶

第4回：11月30日（水）15：10～15：50

①国内 YF の概要

②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」の進捗状況報告

第5回：12月8日（木）15：10～15：50

「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」発表会（各班5～10分のプレゼンテーション）

第6回：12月19日（月）11：30～12：10（後期中間試験最終日）

国内 YF 準備（最終確認）

(3) フォーラムに参加して

本フォーラムは、日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させるとともに、第11回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（2017年8月エストニアにて開催）への参加者7名を選考する場でもあったため、参加する生徒達の意識も高く、意欲的な取り組みが随所に見られた。今回の新しい試みとして、①IOCが開発したOVEP（オリンピックの価値教育プログラム）を用いた演習、②アダプテッドスポーツ体験、などが挙げられる。①は講義で学んだ内容をふまえ、グループで「仮想オリンピック・ミュージアム」の構想を考え発表するという課題が与えられた。ミュージアムのコンセプト・対象・会場・展示の工夫・象徴するアスリートなどを考えさせるだけでなく、「身体と意志と心のバランスを表現する彫像」という表現課題も提示され、プレゼンテーションにもグループ構成員全員の表現が求められる課題となっていた。②は車いすポートボール、シッティングバレー、ボッチャなど、さまざまな人々が楽しめるパラスポーツを体験することで、生徒の理解深化や意識変容が見られた。3日間の活動を通して、他校の生徒と交流を深め、英語によるディスカッションやグループでのプレゼンテーションの機会を得て、生徒の成長する姿を見ることができた。



表現課題「身体と意志と心のバランスを表現する彫像」



アダプテッドスポーツ体験（車いすポートボール）

2. スーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) としての取り組み

採択を受けて3年目、「SGH スタディ（総合的な学習の時間・土曜日実施各学年1単位）」が始動して2年目となるが、初めて3学年（前期集中2時限実施）が同時進行で取り組むこととなった。オリンピック教育に関連する部分を以下に示す。

(1) 第3学年の概要

昨年度の研究活動を継続し、4～6月に最終報告（論文作成）、7月に最終発表会、9月に優秀研究発表会・表彰、まとめ・アンケート調査がおこなわれた。各グループの生徒たちは Google Classroom 上に置いたテンプレートをダウンロードして、A4判で8～15ページ（およそ1～2万字）の論文作成に取り組んだが、特に苦勞していたのは英文と和文で執筆を課された Abstract（梗概）である。和文で400字程度、英文100語程度で作成した。

内容的な要件として、「研究課題・目的・課題設定理由・研究の意義・先行研究のまとめ・研究方法と過程・結論（結果と考察）・今後の課題」を含むこととした。また、分担執筆が基本となるため、文責が明らかとなるよう注意を促した。最終発表会では、各グループを8会場に割り振り、2週にわたって発表を行った。各グループは発表10分、質疑4分の時間が与えられ、分野を横断する形で自分達と異なる分野の研究発表を聞くことになった。教員は発表の動画記録やプレゼンファイルなども参考に、優秀グループの推薦をおこない、優秀論文を選出した。①分野（オリンピック・パラリンピックにおける諸課題）から選出された優秀論文およびその他の研究テーマは以下の通りである。

- 優秀賞 東京オリンピックを見据えたインフォメーションアプリの開発
- 優良賞 オリンピズムの具現化～オリンピックとパラリンピックのあり方～
- 敢闘賞 シットイングバレーを広めたい～ためしてシッティン～

その他のテーマ

- ・東京オリンピック開催に向けての首都直下地震の対策
- ・にわかファンの存在意義
- ・反オリンピックについて
- ・スポーツの魅力と有名選手の関係
- ・オリンピックにおける野球の戦略的勝利法～統計的観点と物理的観点から～
- ・スポーツの魅力
- ・日本サッカーの振興への研究
- ・新しい障がい者スポーツを作ろう
- ・体幹について
- ・日本のスポーツ実績向上に伴う金銭面マネジメントの重要性について
- ・テレビとオリンピックの関係について～東京オリンピックの理想の形～
- ・アフリカでオリンピックは開催可能か
- ・2020年東京オリンピックに際して新設される施設の後利用について
- ・オリンピック選手を取り巻く環境～マルチサポートの実態と改善～

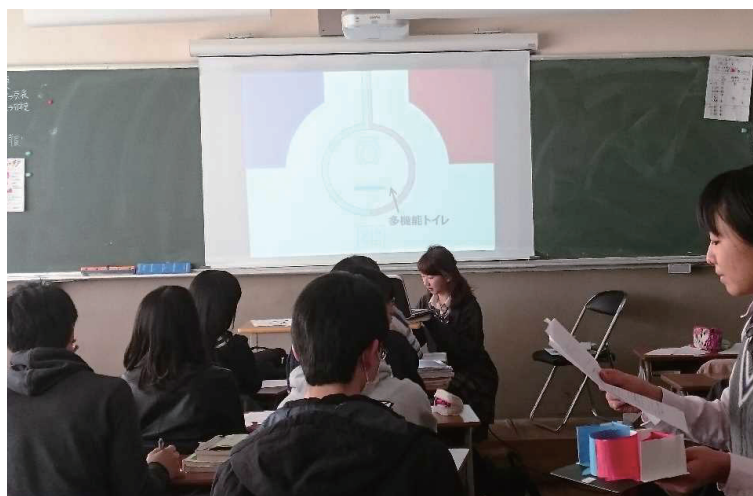
(2) 第2学年の概要

昨年度とほぼ同じ流れで実施された。4月にオリエンテーション、SGH スタディで取り組む3分野（①オリンピック・パラリンピックにおける諸課題、②地球規模で考える生命・環境・災害、③グローバル化と政治・経済・外交）の紹介、教員によるミニ講義などを行い、5月から7月にかけて仲間探し（研究グループ形成）とテーマの焦点化を行い、9月から本格的な研究活動に入った。1月には2週にわたって中間発表会を行い、代表に選ばれた3グループが、2月4日に開催されたSGH活動報告会で発表を行った。各グループの研究テーマと人数は以下の通り。

- ・アスリートと怪我（女子5名）
- ・肉体的疲労とパフォーマンスの関係性（男子4名）
- ・サッカー選手のセカンドキャリアについて考える（男子3名、女子1名）
- ・競技の認知度とオリンピック・パラリンピックの関係（男子3名）

実践報告 ▶

- ・バリアフリー・ジェンダーフリーから見るオリンピック・パラリンピック施設内におけるトイレの表記についての考察と提案（女子4名）…代表発表
- ・アスリートを身近で支える人々（女子6名）
- ・マイナースポーツとメディア（女子4名）
- ・街中のマークを改善しよう（女子6名）
- ・東京オリンピックの知名度を上げよう（男子2名、女子1名）



2年生の中間発表会（模型を見せながらトイレのデザインをプレゼン）

3. トーマス・バッハ IOC 会長来日記念特別式典への生徒派遣

時間的な余裕のない中で生徒へ呼びかける形となったが、7名の生徒が希望し、抽選で2名の生徒が参加した。参加した生徒の報告書を以下に紹介する。

トーマス・バッハ IOC 会長来日記念特別式典報告書

2016年10月22日

1年1組 儀賀柚奈

10月20日（木）筑波大学東京キャンパスにて IOC 会長の来日記念特別式典が開かれた。この日バッハ会長は筑波大学の名誉博士号を授与され、「オリンピックの価値～スポーツと教育の役割」というテーマで特別レクチャーを行った。バッハ会長の他に、森喜朗会長・永田恭介学長・竹田恒和会長・小池百合子知事・鈴木大地長官が登場し、それぞれ東京五輪に向けてスポーツ教育について各々の考えを述べた。ここでは簡単にそれぞれの話をまとめる。

●永田恭介（筑波大学学長）

筑波大学がオリンピック教育や国際交流に力を入れていることについて言及し、その上でバッハ会長のこれまでの取り組みに対し敬意を表していた。この会に筑波大学の附属校生徒が出席していることも紹介していた。バッハ会長に名誉博士号授与の際、記念品として漆の工芸品を渡す。

●森喜朗（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長）

筑波大学の歴史を喜びに披露し、東京五輪に向け、バッハ会長を父のような存在として共に協力していく旨を話した。

●竹田恒和（公益財団法人日本オリンピック委員会会長）

オリンピックムーブメントを若い世代に広げるために尽力することを話していた。

●小池百合子（東京都知事）

東京五輪ではアスリート・ファーストの方針で、IOC としっかりと連携し都として出来ることをしていくことを、自信を持った様子で話していた。

●鈴木大地（スポーツ庁長官）

アンチドーピングをはじめとするバッハ会長の取り組みに賛成の意を示す。筑波大学の TIAS (Tsukuba International Academy for Sport Studies) という団体については、「実践的な人材育成」の場であるとして紹介していた。

●トーマス・バッハ（国際オリンピック委員会会長）

嘉納治五郎、クーベルタン男爵が「教育」によってスポーツ界のプラットフォームを築き、今筑波大学がオリンピック教育に深くかかわっていることから話を始めた。グローバルな教育の現場において筑波大学は革新的な方法をとっていると述べ、東京五輪に向けて「日本のやり方でスポーツの価値観を生きる」ことを推奨した。話はグローバル化に移り、オリンピックには柔軟性とコスト削減つまり「アジェンダ 2020」が欠かせないと宣言した。クーベルタン男爵やネルソンマデラの言葉を借り、東京五輪に強い期待を語った。

まず驚いたのが、中学の頃からよく耳にしていた嘉納治五郎の名前を登壇した全ての人が口にしたことだ。今まで身近すぎてその偉大さを理解できなかったが、この会でいかに嘉納治五郎がオリンピック教育に尽力したかが分かった。もう一つは、バッハ会長のレクチャーで話の内容が「教育」から「アジェンダ 2020」の重要性へ視点が変わったことに、会長の将来展望への強い意志を感じた。スポーツとしてではなく経済的に考えるオリンピックの話は私にとって新鮮で、思わず同時通訳用の機械を付け忘れる程だった。改めてこのような現場に出席できたことをうれしく思う。

トーマス・バッハ IOC 委員長来日記念特別式典参加についての報告

2年4組花渕真生

私は先日、トーマス・バッハ IOC 委員長来日記念特別式典に参加してきました。バッハ会長の講演はもちろん、小池百合子東京都知事、森喜朗組織委員会会長、竹田恆和 JOC 会長、鈴木大地スポーツ庁長官といった、今話題の方々のお話も聞くことができ、とても有意義な時間になりました。

今回は、バッハ会長に筑波大学名誉博士の称号授与と会長の特別講演会を実施するという趣旨の式典でした。筑波大学とオリンピックをつなげるものとして最初に挙げられるのは、筑波大学の前身校の校長を務め、アジア初の IOC 委員ともなった嘉納治五郎先生です。私も中学生の時から、体育や総合学習の時間で、先生について学習していたのでそれなりの知識はありましたが、いつもテレビで見ているような有名な人の口からそのお名前が出ると、改めてその偉大さを感じました。武道館に飾られた額の中におじいさんではなく、優れた競技者、教育者だったということをお忘れはいけません。

バッハ会長は、「オリンピックの価値～スポーツと教育の役割～」のテーマで（英語で）講演をしてくださいました。その中でも印象に残っているのは、スポーツも教育も、最後には世界平和につながるという言葉です。もともとは平和の祭典だったオリンピックも、現在ではメダル至上主義とも言われるほど、その意味が変化してきているように感じます。そのような中でも、スポーツには本来、世の中を変える力があり、オリンピックはその力を伝える舞台ともなりうるのだということを改めて考えさせられました。

平和の祭典オリンピック、そしてそれを伝えていく教育、本校で行われているオリンピック教育は、バッハ会長のおっしゃっていたことを体現していると思います。2020年には東京五輪が待っています。そこに向けて、私もできることから考えようと思いました。

4. OVEP に関する教員研修会への参加

平成 28 年 10 月 18 日に虎ノ門ヒルズで開催された、オリンピックの価値教育プログラム（OVEP）に関する教員研修会に本校から教員 2 名が参加した。他の附属学校教員の他に他県からの参加者もあり、演習を多く取り入れたプログラムは自分の専門教科の授業の参考になった。